

武蔵野市第六期長期計画・調整計画策定委員会

オンライン意見交換会

■日時 令和5年3月10日（金） 午後7時1分～午後9時6分

■場所 Zoom ウェビナー 武蔵野市役所

出席委員：渡邊委員長、岡部副委員長、木下委員、久留委員、古賀委員、鈴木委員、
中村委員、箕輪委員、吉田委員、伊藤委員、恩田委員

欠席委員：なし

事務局が、オンライン意見交換会の進行及び注意点等について説明した後、意見交換会の趣旨、今後のスケジュール、意見の取扱いについて説明した。

続いて策定委員会委員長が挨拶した後、委員が自己紹介し、意見交換を行った。

【市民A】 僕は視力矯正に「ふぐあい」を抱えて悩んでいる。その「ふぐあい」を、専門家の方々と対話的な関係を築いて改善したいと思い、様々な窓口相談に行ったが、医療に関わることは協力することが難しいとのことで、なかなか対応していただけない。社会福祉協議会など公的機関の窓口で、医療に関わることでも専門家を紹介していただけないか。専門家を紹介していただけないか。専門家と対話的な関係を築くにはどうしたらいいかを一緒に考えてもらえるような制度とか仕組みがあるといい。

僕はひきこもりとか困難を抱えた人たちの声を政策とか支援に生かしたい。三鷹市には「Machikoe（マチコエ）」という、市民の声を政策に反映する協議会のようなものがある。武蔵野市にも市民の声を政策に反映できる対話の場ができればいいと思う。

【A委員】 今抱えておられる「ふぐあい」に、現時点で適切な対応ができていなくても、今後とも引き続き相談窓口等、様々なつながりを駆使しながら、決して諦めずにつながっていただきたい。相談窓口には様々なネットワークがあり、これを駆使することで解決に導くことを目指している。策定委員会でも、こうした相談窓口の機能強化について、引き続き検討する。

ひきこもりについては、社会問題として認知されつつあることから、策定委員会でも検討している。計画の中にぜひ盛り込んでいきたい。

【B委員】 子ども・教育分野でも、学校に行くことができない子どもたちの支援がもっと必要だという声をいただいている。子どもたちの居場所をこれからも検討する。

【委員長】 ひきこもり対応は年代ごとに様々であり、累積もあるので、子ども・教育分野、健康・福祉分野だけでなく、分野横断的に考える。三鷹市での協議会方式についても貴重なご意見として承る。

【市民B】 コミュニティの希薄化が進んでいる。松下圭一先生の言う、コミュニティが希薄化するのをまずどうにかとめて、つながりができるようにしていかなければいけない。武蔵野市のコミュニティ構想の前提は、成熟した市民ということだ。コミュニティ構想の考え方が自治基本条例の中にも流れているというのが私はとても気に入っているが、このままこの前提で進めていっていいものかを考えないといけないのではないかな。

【C委員】 これは武蔵野市だけの問題ではなくて、日本全体の問題でもある。コミュニティが希薄化し、地域での共助、互助が、以前と比べて薄くなっているというのは私も実感している。それを施策としてどうすればいいか、私自身も妙案がない。ただ、私は今の住まいに転居してから、近所の方に誘われて、おやじの会という LINE グループに入ったのだが、そこでは地域を盛り上げるための情報交換を行い、季節に見合った行事の企画運営をするなど、活発に活動している。武蔵野市の各地区にあるかどうかかわからないが、うまくいっているケースとして提案等をしていければと思った。

【副委員長】 コミュニティの希薄化は本当に深刻だ。住んでいて快適だと思っても、つながりがない。つながりを持ちたいと思っても、機会がない。

私は、縁があって野外活動に引きずり込まれ、ジャンボリーに 20 年近く関わっている。これは地域コミュニティの関係性としては非常に楽しく、かつ有意義だ。防災にも強いと思う。また、私は開かれた学校づくり協議会にも行っているが、今、不登校の問題が深刻になっている。コロナ、核家族化といった様々な要因があるが、コミュニティの希薄化がこれを加速している。不登校の子どもを抱えた親や関係者は、相談する相手もいなくて、孤立している。みんなで支え合える状況になっていけば、不登校は減っているかもしれない。多くの方が地域に貢献できてコネクションを持つことができる機会をプロモートし、今後の施策に生かすべきだ。

【市民B】 テーマ別のコミュニティは、仕掛け人がいて盛り上げやすい。しかし、武蔵野市のランドデザインとしてのコミュニティ政策は、老若男女誰でも集まれるところをということで、おやじの会等とはまた違う。テーマがないのが地域コミュニティだ。そこをどうするかがコミュニティ構想だが、このままだとコミュニティは消滅する。テーマのないコミュニティを考え直す必要がある。例えば、テーマ別のコミュニティの集まりで地

域コミュニティをつくってもいいのではないか。コミュニティ構想があつて、さあ市民やりなさいという状態ではもう無理だ。

【委員長】 地域コミュニティが大事だということは、ある程度共有できていると思う。ただ、先ほど名前の挙がった松下圭一をはじめとした 1970 年代に活躍された方々がこのコミュニティ構想を考えたときには、大きく二つあつた。一つは、自分たちがそれぞれの関心に基づいて自発的に参加し、地域をつくっていこうというもの、もう一つは、強制的に入る地域社会である。ただ、地縁的な地域コミュニティは都市には向かない。今でも、武蔵野市の全ての地域に自治会を強制的につくってほしいとは誰も考えないが、自発的なものだけでは、市民Bさんの問題意識のとおり、先細っていくだけである。

個人的には、副委員長の「引きずり込まれて」という言葉がキーだと思っている。副委員長は、ジャンボリーに興味はなかったかもしれないが、何かのきっかけで引きずり込まれた。それは自発的というよりは、人間関係の中で組み込まれていった。C委員も、おやじの会を初めから知っていたわけではなかったが、今は入っている。自発的というよりは、何かの引っかかりが巻き込まれる回路をつくる。その巻き込みに本当に参加するかどうかは本人の判断になるが、巻き込む機会をふんだんにつくる。それは学びでもいいし、趣味でもいい。声かけみたいなものでもいい。地域に関わることが大事だから関わってくださいという言葉は、関心がない人には全く届かない。

私は今、ロンドンにいるが、社会的手法に興味があつて、医療の中でもコミュニティに関わるような機会をどうつくるかという政策を見ている。医療に限らず、あらゆるところでコミュニティに関わる機会をつくれると、市民Bさんが考える部分に少し貢献できるのではと思った。

【市民B】 今、具体的にどうしたらいいかということを探しているわけではない。そろそろ考えたほうがいいのではないかという話をしたい。特に、僕は自主三原則についてはもうちょっと考えたほうがいいと思っている。自主三原則をやめて行政の下請けになればという話ではないが、自主三原則にはもう頼れない。高田先生の言うエンパワーの話は、具体的にはわからないが、何かしらのカンフル剤を入れなければ、自主三原則ではもう回らない。考え直したほうがいい。

【D委員】 コミュニティは、生まれてから亡くなるまでずっとそこにある組織だと思う。イギリスでは、家庭医制度があつて、生まれたときから亡くなるまで、その地域の先生が見る。同じように、コミュニティもずっと見ていく。

これまでの市民の意見に、コミュニティセンターをどのように生かしたらいいかという

ということについて、例えば不登校の子どもたちの行き場所をコミュニティセンターに求めたらいいのではとか、図書館が足りないのでコミュニティセンターにとか、DX化にあたり、学びの場所があったらいいのではないかというのがあった。コミュニティセンターを上手に、機能的に利用できるシステムを各コミュニティセンターで話し合い、市はモデルみたいなものを提示しながら、多くの世代が自然とたくさん集まって利用できる場所をつくれたら、もう少し活性化するのではないか。

【委員長】 自主三原則は、コミュニティの関わり方を自主参加・自主企画・自主運営でしていこうというものである。数年前に行われた「これからの地域コミュニティ検討委員会」では、市からもある程度提案できるように、つまり、自主企画というところを緩やかにしていこうという議論があった。コミュニティをどう考えるか、策定委員会でも議論したい。

【市民C】 歩道の舗装はブロックが格子状に敷き詰めてあるが、三鷹駅近くの駅前の大通りは、街路樹の根上がりで浮いてきている。LINE で現状写真を市役所に届けた。明日は3.11でもあり、災害が起きたときのことを考えている。地震などがあつたら、あのブロックは、剥がれて歩行に支障を来すのではないか。あれが使われる理由は何か。災害時に逃げやすい経路を考える部署や、何か決まりはあるのか。近所のご高齢の方は、ブロックのほんの数ミリのずれにつまずいて、額から出血するけがをした。防災とかまちづくりについて、考えてもらいたい。

【E委員】 舗装には、剛舗装と柔舗装という2種類があり、剛舗装はコンクリートで固めたような舗装をいう。強度はあるが、地盤が狂うと割れてしまう。一方、柔舗装は、アスファルト舗装のようなものをいい、地盤の変化に追随する。ブロックの舗装はインターロッキング舗装といい、地盤の変化に追随し、大きく地盤が狂っても外して再利用できる。また、アスファルト舗装やコンクリート舗装は雨が地面にしみ込まないが、ブロック舗装は、砂の目地から雨水を浸透させる。見た目にもおしゃれで、いろいろなパターンをつくれることから、人通りの多い、商店に近い場所ではブロック舗装が多用されている。地盤の変化で数ミリ浮いたり沈んだりするが、メンテナンスの頻度を上げれば非常に快適な舗装になる。どの舗装にも長所、欠点があるが、ブロックが一番優れた舗装材だと思う。

【市民C】 もしも急な、大きなことが起きた場合は、近くの人と通り道をつくりながら、そのブロックを寄せておくという行動をとれば、その後の復旧にもつながるという理解でいいのか。

【E委員】 ブロックは10センチ×20センチぐらいの、片手でも持てる大きさで、1個が外れれば、次々外すことができる。ほかの舗装に比べて、緊急対応ができる。

【市民D】 コミュニティの希薄化、つながりづくり、居場所づくり、市民の貢献を引き出す仕組み、巻き込まれる引っかけづくりと、幾つかキーワードが出てきた。緑・環境分野では、地球温暖化、省エネルギー、省資源化の問題があるが、特に今年は光熱費が上がり、個人の節電や努力ではどうしようもないところまで来ている。コミュニティづくり、コミュニティの希薄化などへの解決法として、例えば無料で暖をとれる場所、暑さをしのげる場所を市内に幾つかつくってはどうか。そこで人がつながっていくし、人が孤立化した状況で使うよりもエネルギー量も節約できる。

【副委員長】 個別に冷暖房するよりも、人が集まる場所を冷暖房するほうが、エネルギーコストを低減する効果はあるが、皆さんがそれを求めるかどうかという別の議論もある。ただ、私の子どもは、小さいころ、コミセンは涼しくて快適なので、集まって床でゴロゴロしながらゲームをしたりして、そこからまたコミュニティができていった。みんなが快適に集まれる場所をつくることは大事である。

日本は全てのエネルギーを輸入に頼っているのだから、その代金が上がれば、エネルギーコストは確実に上がる。既存の原発を一気に再稼働させれば、ある程度のエネルギーコストの低減効果はあるが、別のリスクを生む。武蔵野市民全員が電気自動車を使って、再生可能エネルギーで充電することにすれば、CO₂を出さないし、エネルギーの節約にもなるが、日本全体で見ると、問題がほかのところに移っていつているだけだ。

市の施策ではどうしようもないことだが、私は、都が管理する巨大な浄水場の上部空間に太陽光パネルを全部敷き詰めてはどうかと考えている。

【E委員】 武蔵野市は人口密度が高く、単位面積あたりに人がいっぱいいる。田舎のバスは空気を運んでいるような感じだが、同じエネルギーを使って、都市は大量の人間を運ぶ。1人当たりのエネルギー消費量は、人口密度の高い都市のほうが低い。人口が多いところの一人ひとりが少しずつエネルギー消費を減らせられれば、全体のエネルギー量もかなり削減できる。このことは、国全体が求めるコンパクトシティのあり方に沿っており、武蔵野市はまさにコンパクトシティだ。

【委員長】 この手の議論は非常に複雑なところがある。市民レベルでは今、光熱費がかなり厳しい。これ以上高騰すると、今後の生活費を圧迫する。光熱費の高騰化にどう対応するかという側面についても、策定委員会で議論する。

【市民B】 先ほどからいろいろご提案があつて、うれしい限りだ。いろいろなコミュニティがあつて、それぞれでいいと思うが、市の施策としてのコミュニティで動いているのは、やっぱりコミュニティ協議会で、コミセンだ。その人たちが、現状、館の運営しか考えていないとか、窓口業務をバイトとしか考えていないとかで、地域を見ていない。成熟した市民が地域コミュニティを考えて集まっている団体ではないということを前提に考えてほしい。地域のことをやっ払いこうと思っている地域の人には本当にわずかしかない。このコミュニティ構想と自主三原則を大前提に進めていくことについて、考え直そうという話をさっきからしているのであつて、こうしたら盛り上がるんじゃないかとかいうことはその後でいい。行政が一切手を出さないという姿勢をそろそろ変えたほうがいい。市民を盛り上げるために、行政も一緒になって動く。市の施策として、市民へどうエンパワーするかということを考える時期に来ている。

【C委員】 おっしゃるとおり、こういう地域でこういうことをやって、こういうメリット、効能があるということを示し、情報を収集して、それを市民に示していくことが、市ができることの第一歩である。市ができることは、グッドプラクティス、いいロールモデルを出すことであり、それをやってみたらどうかと提案するぐらいではないかと個人的には思っていた。

また、市民の方々が自主的に動くということに関して、先ほどから「巻き込まれる」とか「巻き込む」というキーワードが出ているが、現状の生活で手いっぱい、もしくは現状に満足しているということなのか、動ける人、動く人がなかなかいない。コミュニティを再生するということが自分にどういうメリットがあるのか、どう自分事にするかという啓発が重要になるのではないかと。そういう情報提供も市はできるのではないかと。

【委員長】 市が今後どのようにコミュニティに関わるか、コミュニティの自主三原則との関連等をどうするかは、策定委員会に持ち帰り、議論する。

【市民E】 私たち夫婦には子どもがいないので、会社との行き来みたいな状況でしか住んでいないという感じだったが、地域猫の会がきっかけで、少しずつ地域に目を向けるようになり、地域の方とも話したりするようになった。市報に載っているイベントにも興味を持つようになったが、コミセンの天文のイベントも、ナイトハイクも、子どもさんとその親が対象で参加できなかった。西久保周辺は単身世帯の方も多し。そういう人たちがこのまちをいいなと思って定着し、武蔵野市の地域に目が向けられるようなイベントがあつ

て、一人でも参加しやすくなればいいと常々感じている。

CO+LAB MUSASHINO という市内事業者に向けての産業連携プロジェクトを最近見かけるが、居酒屋や市内事業者にお話を聞いても、ほかの地域から働きに来ている人が多くて、市の施策をほとんど知らない。商店会に入っていないという方も結構おられる。そういう施策は、ふだんどう広げているのかということも、最近気になっている。

【C委員】 子どもがいなければイベントに参加できないというのは早急に見直すべきではないか。どうしてそういう制限があるのか、合理的な理由の有無などをまず情報収集して、策定委員会で、参加制限について意見を申してみたい。

【委員長】 これまで多くの人々は、家族がいて、子どもがいるということを前提にしてきた部分がある。私自身も子どもがいなくて、地域と関わるきっかけがない。ただ、今は家族のあり方が変わってきている。そのことを踏まえた広報について考えたい。

【F委員】 産業連携の話というよりは、市の施策を、本来想定しているサービスの需要者にどう届けていくのかということが一番の問題である。武蔵野市は、市報むさしの、市役所のホームページ等でも、かなり熱心に情報発信している。ただ、それらを見ていない方にリーチしていない。SNSを使った新しい取組みで改善できるところはあっても、興味がない方にはやっぱり届かない。来街者や在勤・在学の方たちにダイレクトメッセージを出したくても、データベースを持っているわけではないので出せない。できることについて考えあぐねているというのが正直なところだ。

コミュニティについては、住民間の話が多く出されているが、長期計画は、住民にとどまらず、来街者の方もという考え方でつくっている。まちに来る方に対してどう情報を出すのかということになると、個人的には、古い考え方だが、一番人が集まる場所、つまり吉祥寺駅、三鷹駅、武蔵境駅の3駅に、デジタルサイネージのようなものをつくって、情報を発信することを考えなければいけないのではないかと思うが、デジタルサイネージは、景観条例や景観ガイドラインと密接に関係する。行政計画である長期計画・調整計画は、個別計画での具体的な検討と整合性をとりながら、時間をかけて検討する必要がある。

【G委員】 ナイトハイク等は、コミセンの独自事業で、市が関わっている事業ではない。ただ、市が施策を考えるときも、まず目的を考えるので、ターゲットをどこに絞るかとなると、ある程度限定されることになる。イベントには、担い手とかボランティアとして参加するという方法もあるが、今後、周知の際の募集方法について考えなければいけないと思った。武蔵野市は単身世帯の方も多し。そういう方にも市の事業に参加していただき、それがきっかけでコミュニティに参加するという形ができればいいと思う。

【市民C】 ナイトハイクは、親子で参加ではなく、子どもが参加するが、行動隊という、子どもたちと一緒に歩く大人のボランティアが必要で、今年、3年ぶりに再開されるという事で募集があった。お知らせは、学区域のお子さんと、市外の学校に通う市内在住のお子さんに向けて出しているが、学区域の小・中学校のお子さんが中心だ。周知の仕方をもう少し考えたほうが良いということを感じた。

【市民D】 武蔵野市民を動かすのは難しいというところが、計画を立てるときのハードルを高くしていると感じた。

新住民とか旧住民という言い方があるが、旧住民との結びつき、新住民の取り込みは難しい。武蔵野市民というアイデンティティーが生まれないと、自分が住んでいるところの地域課題を見つめるようにはならない。私も、市報は見ないし、情報を振られてもアクセスしなかった。アプローチの仕方というよりも、アプローチのさせ方というかガイドの仕方、ファシリテーションではないか。

また、武蔵野市は昼間人口と夜間人口が違うという特性もある。グッドプラクティスという言葉があったが、レッスンズ・ラウンド（失敗から学ぶ）で、振り返りということがあってもいい。

何かしらの困難を抱えていると、ただ怒りをぶつけるしか方法がないと思ってしまう。そこから、自分の住むまちを変えたいと思い、相談するという形から、貢献人になる。困難を抱える人が地域資源であるという見方がどこかでうまく入っていけばうれしい。

私自身も独居だが、子どもと関わるが多くなると、東部地区と西部地区のバランスを感じる。

【C委員】 自分事にしないと、人はなかなか動かない。市が今できることは、グッドプラクティスを提示して、こういう結びつきがあれば地域、ひいては自分にこういうメリットがあると見せることだと思う。

生活課題を抱える方たちが、窓口に行って困り事を受けとめてもらうのも、声を上げるということではないか。それが施策に反映され、反映されなかったにしても何かしらの変化を生じる動きになる。それが市政参加の意欲を高めることにもなる。

【市民F】 （チャット欄より）市は、住民投票条例、子どもの権利条例など条例づくりに力を入れているが、住民は果たしてそのような条例を求めているのか。イデオロギー優先で、住民の生活に目を向けていないのではないか。まちづくりについても、駐輪場を駅

から遠ざける計画を進めているが、便利な駐輪場がなくなって困っているという声を聞く。しかも競争入札をせず土地を売買して巨額損失を出しており、住民にとっては「不便」「損失」でしかない。隔地駐輪の規則を非公表で改定するなど、不透明なところが多すぎる。一方で、ごみ袋が不足するなど生活に関する問題については対応していない。押し付けの条例・計画を十分な議論もせず、十分な公表もなく進め、一方で生活に関わることをなおざりにするのは武蔵野市の大きな問題ではないか。

【委員長】 チャット欄に駐輪場、住民投票条例、子どもの権利条例に関するコメントをいただいた件について、まずE委員よりお願いしたい。

【E委員】 駐輪場の問題は、市の未利用地等を使って整備し、動かすという「自転車操業」状態である。駐輪台数そのものは、一時期の不足が大分改善されている。ただ、駐輪場を駅のそばに置くか遠くに置くかは、ほかの土地利用との兼ね合いで決まる。そのため、固定的にしないで柔軟に、現状を若干後追いしながら対策している。土地の売買の問題については、私はわからないのだが、市長と策定委員会との意見交換の際に、市有地の売買についての情報公開をきちんとしてほしいということを上げた。

【F委員】 住民投票条例については、基本施策1の1)「自治基本条例に基づく市政運営」で「熟議・熟慮を重ね」と書いた。このワードは私が選んだ。住民投票に関しては、自治基本条例で制定すると既にうたわれている。この自治基本条例は市議会の議論で制定されたものである。一方で、先般の住民投票条例の議論は、正直言って、市民の随分遠いところで行われているという感覚だったので、住民投票に関するものは市民で考え直すこととなってよかったと思っている。拙速にやる話ではない。重要なのは、大事な話は熟議・熟慮を重ねることだ。それが今回の調整計画の中で打ち出した方向性である。基本に立ち返って、皆さんで考えようという方向であるをご理解いただきたい。

【委員長】 我々は条例をつくった立場ではなく、制定された条例に基づいて計画策定を行う。それを前提条件にしっかりと議論する。今すぐに自治基本条例を変えるべきであるとか、変えるべきではないということを議論しているわけではない。

【B委員】 子どもの権利条例についての議論で、イデオロギー優先で、住民の生活に目を向けていないのではないかというご意見をいただいた。こども家庭庁が新しくできて、その中で法律も動く。虐待に遭った子どもたちの声を聞くアドボケイト（代弁者）という方を置くことになるが、子どもの代弁者は各自治体でと言われており、虐待を受けている子ども、様々な課題を持つ子どもたちの声を聞く人たちを市で置くことができるようになる。子どもの権利条例があることで、子どもが守られる部分はある。

【委員長】 既にある虐待防止法は、あくまでも虐待をする側と、周りの報告義務についてであり、虐待を受ける子ども側の声をすくい上げながら、その子どもたちの状況を考えるには子どもの権利条例の発動が必要になる。

【H委員】 放置自転車の問題はかなりクリアされてきている。特に吉祥寺については、歩行者と自転車の輻輳という問題がある。買い物の駐輪も含めた、通勤・通学だけではない駐輪場のあり方を考えており、少し離れたところに駐輪場を設置して、そちらでおりて歩いていただく形のまちづくりを進める方向で今、動いている。

【市民G】 コミセンに限らず、いろいろなコミュニティで、特に担い手がないところでは、巻き込まれた人を自分たちのコピーとして動くように強要しがちだ。巻き込まれた人は、いきなり本家の嫁になったみたいな大変な目に遭って、去ってしまう。コミュニティの中も、多数決民主主義のようなところがあって、問題意識を持った人が変えることは難しい。そこに市の介入というと大げさだが、市からの声かけがあるといい。

多数決民主主義ということでは、子どもが未熟なものとして扱われている。子どもは大人よりも利用の制限がかけられることが多い。そこに子どもの権利条例があると、変えていかなければならないことがあるときに、市からの声かけもしやすくなるし、みんなの意識も変わる。子どもの権利条例は必要なものだとは私と考えている。不登校の子どもやひきこもっている子ども、現在、不利益をこうむっている子を助けることになる。

【C委員】 巻き込まれていったときに、もともといる人たちから慣習を押しつけられるのはなかなかの苦痛だという部分には共感する。ただ、それをどう避けていくかに関しては、私も答えを持ち合わせていない。巻き込む、巻き込まれることが重要だという意見が多くある中で、デメリットが可視化されると助かると思いながらお話を伺っていた。

【委員長】 子どもを未熟なものとした利用制限は、合理的なものは残すべきだが、そうとも限らないものもある。子どもの権利条例は、まず子どもの意見を聞くところからスタートする。そのうえで、今ある利用制限の規定等を考え、見直す。我々はあくまで市の計画策定であるので、どういった利用制限があるのか、合理的ではないところについて考えていく。ぜひご意見をお寄せいただきたい。

【市民H】 巻き込まれるというお話が何度か出ているが、巻き込まれた人が「よかったな」という経験ができればいいが、「嫌だったな」という経験は、悪いほうのうわさとか口コミにつながる。巻き込むというのは慎重に行うべきだ。

また、不登校の子どもの居場所というお話が最近たくさん出てきて、それはそれでいいことではあるが、居場所をつくれればいいというものではない。その居場所にどういう人を置くのか。カウンセラーがいるのか。近所の人誰でも行くというのはちょっと違う。そこからサポートにつながる何かがあれば、居場所を幾らつくったところで、不登校の子にはプラスにはならない。

【C委員】 慎重にというのは、おっしゃるとおりだ。コミュニティは、自主的に参加するものであり、抜きたいときにいつでも抜けられるというフレキシビリティが重要である。ただ、全てがそろったコミュニティをつくるのは難しい。

今日は「巻き込まれる」というキーワードが出ているが、私もこの調整計画策定委員会に「巻き込まれた」という感じを持っている。声がかかって、自主的に入ったが、こういう公的な立場で何かをするということに巻き込まれるのもいいものだった。

【A委員】 健康・福祉分野の基本施策4の1)に「本市が誇る高い市民力の源泉である各地域福祉団体は、活動されている人の高齢化や担い手不足が課題となっている」と書いた。ご参加いただくことの対極には、ご負担をいただくという側面がある。負担には、コスト負担もあれば、役割的・マンパワー的な負担や、時間の負担もある。地域福祉は市民の皆様のような負担をいただくことで成り立っているため、市民の皆様に参加の仕方や負担の仕方についても多様に求めている。多くの市民が関心がないわけではないが、できることは限られてくるという立ち位置にあると思う。ただ、武蔵野市の場合、市民のコスト負担は高い住民税として払っている。時間と労力の負担ということでは、現在、専業主婦は減っているし、定年年齢が70になり、男性も女性も働き続けなければいけなくなり、昼間の時間帯がとれないという構造的な問題が生じている。先ほどから話題となっている「巻き込まれる」話とも絡むが、子どもについては、「親権」と「扶養義務」の話が出てくる。扶養義務には、税の扶養と社会保険の扶養という形があり、民法上は直系血族と兄弟姉妹だけということになっている。親権は、身上監護と財産管理で、これも民法等の各法令の制約の中で、どこまで誰が担うのかということが出てくる。これらを総合的に議論する必要がある。局所的な問題だけをとらえた議論はできないと感じている。

【B委員】 子どもたちの居場所は、空間としてつくるだけではなくて、子どもたちをケアし、子ども自身が自己発揮することを支えるというソフト面とともに考えることが必要である。まず、空間があるということ。オンラインであってもいいと思う。そういう何かしらの機会が形としてあって、そこにソフト面もセットにする。ソフトとハード、空間的な部分の両方が保障されるようにというところを、今後の議論の中で深める。

【市民D】 箱と人材、空間とソフトの面は、武蔵野市の東部地区にはあまりない。児童館は武蔵野市には1館だし、あそべえは児童館のかわりにはならない。高齢者関係の施設は結構見かけるようになったが、重度の障害者が行けるような場所がまだない。

多様性という言葉と同時に、交差性（インターセクショナリティ）の問題について、もう少し先を見据えて議論を深めていただきたい。介護に関しても、重度心身障害者の介護となると、武蔵野市内では賄えないために、人材は他市に任せるといった状況が生まれている。箱、人材は、今後の経費の増大につながるが、パターンリズムの逆転、市民が納得する形についても考えさせられる体験をしている。

【A委員】 障害者施策は税負担で行っているのだから、施設や人員といった「数」がなかなか進まないところがある。高齢者については、社会保険化したことと、高齢者が増加することへの対応で、国策として進められてきた。

東京都の障害者の療育環境には、東京小児療育病院、東京都東大和療育センター、府中の療育センターがあり、西側に多い。武蔵野市という視点で見るとご指摘のとおりだが、東京都という視点で見ると、西側の住民は充実しているとなり、見える地図がまた変わる。

【委員長】 交差性（インターセクショナリティ）という言葉は、聞き慣れない方もおられると思う。障害とジェンダー、エスニシティなど様々な要素が複雑に絡み合う中における複合的な差別とか諸問題に使う概念をいう。我々が計画をつくる時に、よく「横串」と言うのだが、一つの軸だけで見たら問題を見過ごすというご指摘は、全くそのとおりだ。多様性は、様々な所属を尊重する。インターセクショナリティは、問題解決の前提となる我々の認識の枠組みそのものがもたらす諸問題を考え直す必要がある。この場合、重要なポイントは、人権をちゃんと考えるということである。そのうえで、個別的な支援とか個別的な問題の絡みぐあいを解きほぐす。ただ、すぐに政策に反映できる部分と反映できない部分がある。

【市民A】 武蔵野市にはひきこもりの当事者会とか家族会がない。それは市に原因があるというよりは、自分たちでやればいいことだが、困難を抱えていたり、普通の人のような生活が送れないと、コミュニティに参加することは難しい。不登校とかひきこもりの子どもを持った親は、普通の学校に行っている子どもを持った親たちとは話が合わないことがあるが、ひきこもり、あるいは不登校というキーワードでつながった集まりだったら、そこでお互いが抱える困難さを共有できる。自分たちが抱える困難な問題をどう解決して

いこうかということを考える中で、コミュニティの大切さを感じたり、ネットワークをつくる必要性を感じることができる。ひきこもりという問題に取り組むことは、コミュニティを強くすることにつながる。

【A委員】 これまで障害者にしても、様々な病気の家族会等にしても、ピアカウンセリング的なネットワークを中心に動いている。同じような立場とか悩みを抱えた人たちが集まって、同じ仲間として話し合いをするという取組みの重要性は認識されているところだが、なかなか理解されないという意識が当事者にはある。総合相談は、市が話を聞くみたいなことではなく、自主的な取組みをいかに市が支援をするかということである。

【委員長】 当事者の会とか家族の会という、いわゆるピアカウンセリングができる会はとても重要である。ただ、市がつくれと言ってつくれるものでもない。策定委員会としては、支援できる枠組み等をつくるといったことも含めて考えたい。

【委員長】 意見交換は以上で終了とする。オンラインでの不慣れなところをご容赦いただきたい。チャット欄等にいただいたコメントも含め全て策定委員会に持ち帰り、多様な意見について考えながら計画策定に進むこととする。

事務局が、意見交換会終了後の追加意見の提出方法及び策定委員会のオンライン傍聴について案内し、委員長がオンライン意見交換会を閉じた。

以 上